

## “ 沈黙の年月 ”

### ルカによる福音書 2 章 40 節

ここオーブンドアで今日用意したメッセージの準備の為に、祈って、考えて、学んできましたが、その中でもここ最近、私の想像力はイエス様の沈黙と言うテーマに捕らえられてきました。

今日私は、キリストのご生涯に於いてキリストが何回もとりわけ沈黙されたこと、このことについて見ていくことからメッセージを始めたいと思います。

この世におけるキリストの話で、キリストが素晴らしい知恵の言葉を与えてくれたり、とても大事なことの為に闘ってくれたり、ご自身や他の誰かを守る為に意見を言ってくれたり、そのように私達が期待してもいい、いくつかの重要な場面で、キリストは、そのようにされません。

クリスチャンとして、人生の大事な目的の一つは、キリストをもっと完全に知るようになることです。この一連のメッセージで共に学ぶことが、キリストについてより深い理解に私達を導いてくれるように祈ります。

沈黙は、様々な態様で私達の生活の一部ですね。この情報化の時代で、メディアや私達が持つ全ての電子機器から発せられる言葉の洪水は、それらを積極的に脇に置いておかないかぎり私達を押し流してしまい、静寂を経験することは益々少なくなっています。会話においても、沈黙が気まじくなると感じるかもしれません。特に言うことがなくても、私達は、例え数秒間の隙間であっても、それを言葉で埋めなければならないと思うものです。ただ単にお互いが沈黙していることが心地よく感じることは、お互いの関係が健康的である一つの証拠になり得ます。

遠藤周作の本“沈黙”(最近、マーティン・スコセッシ 監督で映画化された)は、何故神様が、大きな悪や困難に直面して、しばしば沈黙されるのかとい

う大きな疑問を見せてくれます。

沈黙はまた、独創力と美しさへのチャンスでもあります。ビートルズのプロデューサー、ジョージ・マーティンは、かつて“時々プロデュースすることは、足し算の芸術と同じくらい大きな引き算の芸術だ。”と言いました。またドラマーのリンゴ・スターは、“空いていることは埋まっていることと同じように良い事だと常に感じてきたし、隙間はとても感情的になり得る。”と言っています。

皆さんが、マタイ、マルコ、ルカまたはヨハネだとして、イエス様の御生涯の物語を書くという仕事を引き受けて座っていると想像してみてください。何を書き入れて何を除くか、どのようにして選びますか？ 一つ確かなことは、今日私達が持っている聖書の情報量より、皆さんはもっと多くのことを知っているはずだということです。私なら、言うべき重要なことが本当に沢山あると思うだろうから、多分、長い本を書くでしょう。また、イエス様が生きて暮らした全ての期間を書き入れると思います。何故ならそのことによって、書いた本がバランスがとれ、完全なものと感じられるからです。ですが福音書の書き手はそのように書いていません。イエス様の誕生の描写とイエス様が多分30歳前後に、アクティブにそして公に働き教え始めた時のそれとは、大きなギャップがあります。

例えば、ルカは、イエス様が子供の時、10代、そして20代で大人の男性になった時にどのようであったかを、マリアやイエス様の兄弟におそらく(十中八九)インタビューしていたと思います。しかし聖書では、それらの時代のイエス様の人生はほんの少ししか見ることができません。

ヘロデ王から逃れたイエス様の家族がエジプトに逃れナザレに戻った後は、ルカ2章41～51節に、過越の祭りを祝うために家族でエルサレムに滞在していた12歳のイエス様の話があるだけです。

これ以外の事では、私達が今日でも読めるような、ほとんど唯一、大変概略的なことしかありません。“その子は成長して強くなった。彼は非常に賢く

神の恵みによって祝福された。”

これは本当に多くのことがカバー(含んでいる)されていますが、大変概略的ですね。私達は主が聖書に、私達が本当に知る必要のある全てのことを主の言葉として選んで書き入れたと信頼しています。しかしながら、私達の主の御生涯についてこの長い期間の沈黙を無視することは難しいと思われまます。ですから、何がそこにあるか、私達ができる限り近づいて注意深く見て行きましょう。

1 ルカは医者でした。そのように聖書に書いてあります。ですから、ルカがイエス様の身体的な成長を認め注目するのは驚くに値しません。これは、“その子は成長し強くなった。”という事の一つの意味です。しかしながら、“強くなった”と翻訳された動詞は、ただ単に身体的な意味だけを表しているものではありません。同じ言葉が新約聖書に少しですが見られます。そしてそこでは、精神的(霊的)な強さについてより語るために使われています。例えば、ルカは正に同じ言葉を既に使っています。ルカの 1 章 80 節で、バプテスマのヨハネについて私達に語る時に、“ 霊 ” という言葉を加えただけで使っているのです。“ その子は成長し、その子の霊は強くなった。(そしてルカは続けて、“ 彼はイスラエルで公に現れるまで、砂漠に住んでいた。” )後に第1コリント 16 章 13 節で同じ言葉が使われているのを見ることが出来ます。そこでは書き手は私達に ” 目を覚ましていなさい。信仰にしっかりと立ちなさい。雄々しく強くありなさい。” と内的な精神の強さについて語っています。エペソ人への手紙 3 章 16 節で、書き手は、“ どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力を持って、あなた方の内なる人を強くして下さいように。 ” と言っています。

神様は、イエス様のようにあなたや私が強く成長できるよう助けたいと望んでおられます。

100 年以上前、パーシー・エインズワースという名前の人がロンドンで ” イエスの沈黙 “ という短編を出版しました。私にとってこの本は、イエス様が語らなかったこと、聖書の記録で見つからない事柄から私達が理解できるキリストの精神と人格について学ぶ助けになってくれる大変役立つものです。エインズワースは、イエス様の人生の早期の大半を伝記的に書き留めた者は誰もいない、しかし、別の方法で、この伝記はイエス様の性質の中に書かれている。イエス様はこの沈黙の時代を御自身の人格(性質)を作りあげるために使われました。

イエス様がこの時代に為されたこと、そのこと自体が鮮やかな色で、その後どのような人になったのかを表しています。福音書を通して、私達はイエス様の人格、習性、考え方、人々や神様と接するパターンを見ることができます。これら全ての分野において、私達は、イエス様が御自身の時間を過ごすそのやり方(習性)、追い求めることを選んだ目的、御自身で定めたであろうとした人物像について、既に強いヒントを受け取っています。

当時のユダヤ人の家族の男子の長子として、イエス様は父親ヨセフの職業を学んだと思われます。なので大工として硬い手をしていたと思いますが、心は厳しいものではなかったはずです。ヨセフ、マリアその他の沢山の人も、イエス様が生きるための信仰を身につける手助けをしました。ルカの 2 章 42 節では、“ 毎年イエスの家族は過越の祭りのためにエルサレムに行った。 ” とあります。このことや他の祝日を祝うという生活上のリズムは彼らの信仰と深く関連するものでした。ルカ 4 章 16 節では、“ イエスはご自分が生まれ育ったナザレに行き、いつもの通り安息日に会堂に入った。 ” とあります。単なる個人としてだけではなく、家族そして共同体として行う礼拝は、私達の主にとって人間的な発展の面の基本を形取ったのです。

イエス様が成人になった後、ルカ 5 章 16 節で、私達はイエス様の様子を見つけることができます。“ イエスご自身はよく荒野に退いて祈っておられた。 ” 。イエス様は、30 歳になった後から、このようにし始めたのではないと思います。イエス様の初期の静かな年月を含む御生涯を通して、何かそのようにする習慣があったことは疑いのないことです。

イエス様は、信仰によって生活し成長されました。御生涯の旅における最後、大工であったその両手は十字架上で釘付けにされました。イエス様は御自分を十字架に付けた者達に心から、” 父よ彼らを許して下さい。.. “(ルカ 23 章 34 節)とすることができたのです。イエス様には奇跡を起こす力があります。けれどもその力をお金を得たり人々を支配するという身勝手には使われません。その力を癒しや創造のために使われます。イエス様は、かつて誰も持ったことのない、深い愛と、喜び、平安そして 全ての” 霊の果実 “ (ガラテヤ書 5 章 22 節 )を持つお方になります。

このような種類の成長は一夜にして起きるものではありません。私達は福音書で読むことができませんが、イエス様は疑いようもなく、このような豊かな内面的な生命を沈黙の年月のうちに発展させていかれたのです。私達の生活も同じです。私達にも、私達の人生を築き上げるための強固な霊的な土台が必要です。私達が今日ここにいる建物の基礎と同じように、霊的な基礎は見ることはできません。しかしそれは問題ではないのです。ちゃんとありますから。皆さんはほとんど忘れて意識していないかもしれません。ですが、去年の 9 月にこの建物が地震で揺れたように皆さんの人生が揺るがされる時、皆さんがご自分の人生のための強固な霊的基礎を持っているか否かは、大きな違いがあるあるのです。イエス様は、御自身の沈黙の年月の間に、霊的な生活を豊かに成長させるために時間と労力をかけられました。そしてイエス様を信じる私達にも、それを生活の優先事項とするように呼びかけておられます。

2 ルカ 2 章 40 節では続けて、イエス様は ” 非常に賢い ‘ 人に成長されたとあります。もう一度言いますが、私達は、イエス様が多くの事を教えられたのが多分 3 年間で、そのようになるまで約 30 年間の学びがあると聖書から読めます、これは注目すべき素晴らしいことです。その比率は 10 対 1 です。すると 10 年間の学びが 1 年の教えのためにあり、1 年の説教のために 10 年の準備です。もし、これが皆さんのライフワークのための準備に費やす学習時間のように思われるのであれば、長すぎるし困難と思うでしょう。でもどうぞ覚えて下さい。皆さんには良き仲間(共にいてくれる人)がいます。キリストの場合もそうでした。もし、神様が、イエス様の生涯におけるその部

分をイエス様の偉大な御業のための準備期間としてイエス様のために準備されたのなら、神様は皆さんの人生のためにもそのように使うことがおできになります。

イエス様は成長されるにつれて何を学ばれたのでしょうか？ 違う言い方をすると、どのような“知恵”を得たのでしょうか？ ルカが2章52節で、“イエスはより賢くなられた。”と書いていますが、これはどう言う意味なのでしょう？

一つには、イエス様が旧約聖書を注意深く学ばれていたことは疑いの余地がありません。ヨハネ7章15節では、イエス様が大人となりエルサレムの神殿で教え始められた時、ユダヤの宗教指導者達は驚愕したとあります。彼らは“この人はどのようにして勉強することなくそんなに多くのことを学んだのだろう。”と尋ねました。そのことは、イエス様が、教師が典型的に受けるような正式な訓練を受けていなかったことを意味します。しかしイエス様の教えは、イエス様が神様の書かれた言葉を深く理解していたことを示していました。イエス様の祈りの習慣のように、このことは、人生の早い段階から始められ、その後も継続されていたことに疑いはありません。

イエス様にとって聖書を学ぶことは、他の重要な事で忙しすぎなかった場合にするような何かではありませんでした。荒野における誘惑(ルカ4章4節)の際、悪魔に語られたように、イエス様はそのことを知っておられました。神様の言葉は皆さんの人生においては、食べ物と同じくらい必要なものです。それは、私達が1日のスケジュールでベストな時間を神様に捧げる必要があると皆さんに、そして私にも教えているのです。また、聖書を通して神様の言葉を聞くことが含まれた静かな時間のことも意味します。

しかしイエス様は、毎日聖書だけを学んでいた訳ではありません。エインズワースは、“イエス様が毎日何をしていたのか？ 生きる術を学んでいたのです。”と書いています。これらのキリストの“沈黙の年月”の生活は、

記録されていませんが、多分に静かなものとはほど遠かったでしょう。この時期の数少ない話は、イエス様が家族、地域そして国と関係する生活に積極的に関わっていたと非常にはっきり語っています。その後の生涯においてイエス様が人々と対話をされた方法は、イエス様が普通の人々とどのようにコミュニケーションするか既に学ばれていたことを示しています。

イエス様は、彼らがどのように考え、話すか、何を愛し、信じるか、そして何が重要であるかを知っておられたのです。そして彼らの必要と夢に対してどのように話すべきか理解しておられました。このことは、イエス様が御自身が属する文化圏と共同体に深く根を下ろしていたことを私達に教えてくれます。

私達は、イエス様が御生涯の早い時期に、もっと面白い場所にいたいとかご自分の家である天国にいる父なる神様の元へ帰る日を指折り数えていたなどとは全く想像できないのです。

イエス様は神様から与えられたこの世界における人生を責任を持って引き受けられました。学びは、賢くなる事、その大きな部分であったのです。

新しい本を開き、面白い部分を早く読みたくて我慢できなくなり、ページを飛ばし読みした結果(例えば序文)、そもそもその本が何故書かれたのかわからなくなった。と言う経験があるでしょうか？ もしあるのなら、きっとまた最初から読み直さなければならなかったことでしょうね。もし私達が人生においてこのようにし、“良い物”を得るため我慢できなくなったとしたら、何が起きるのでしょうか？ それは、神様が私達に得て欲しいと願う豊かで深みのある人生をおくるために必要な準備(大方退屈ではありますが)を飛ばしてしまうことになるかもしれません。

私達にとって、底の浅い、簡単な、素早く得られる便利なことで満足することも可能ですが、その結果としてより良い意味や目的そして人生の祝福を逃すかもしれないのです。キリストはそうされませんでした。キリストは御自身がされたように私達の人生の準備として知恵を得てキリストに従うよう呼び

かけておられます。

沈黙の年月においてイエス様は、従ってくるであろう者のため確かな準備をされていました。私達がそれをし損なうと、簡単に準備なしに日々を過ごす者になってしまいます。例えば、a) 私達自身が十分に学んでいないことを教える、b) 自分自身の問題が解決されていないのに世界の問題を解決しようとする。c) 自分自身の内部にある悪に正直に向き合うことなしに社会の悪を正そうとする、などです。

私達は、イエス様が私達の天におられる神様と共にされた事や長い時間をかけた事、すなわち密接な関係の中で父なる神様との関係を見つける事を学ぶ、それをする必要があります。それは“単純な少しのこと、これまでも存在した、人生の永遠の意味。”(11p)です。

ある人は失敗します。それは怠惰であったり我慢しなかったからではなく、自分がしなければならないことやそれをどうやってすべきかを学ぶことを辞められない、そんな何かを一生懸命にしたからです。

私達は、成長の階段を昨日飛ばしたことで今日失敗するのです。私達は、手間取る(遅くなる)こと、難しいこと、目に見えないこと、認められないこと、賞賛されたり報酬を受け取れない何かと戦っているのです。もしも高い給料に繋がらない何かだったら、思いも至らないし興味もわかないでしょう。もし、低い地位だったり、出世の機会が限られている何かだったり、批判を受け、痛みや苦しみを含むものだったら、おそらく考えることもせずにそれらを避けるでしょう。

ですが、もし私達がキリストを手本とするならば、キリストの弟子としてキリストに倣って私達の人生を作り上げることができ、前記のような考え方を受け入れることはできなくなります。キリストは決してそうされませんでした。



イエス様は、人目につかない(目立たない)人生に逃げようとはされませんでした。御自分の人生が設定された意味が持てるように神様にお任せしたのです。イエス様は、人々が御自身を好きになるか嫌うか、讃め称えるか恥に思うか、自らのものとするかしないか、という問題を神様の御手に委ねられました。人々に対するイエス様のメッセージは、それぞれが居るところで、わずかしかない状況で、また知られないままで、生きること満足しなさいということではありません。むしろ、“現実の世界では、誰もが神様の前では、わずかではなく、知られないままでもない”と私達は言うことができます。

私達の王様で父であるお方は全てを支配しておられ、一人ひとりを深く完全に見て知っておられるのです。エインズワースは、“あなたが何処にいても、全てを見ておられる神様の光が注がれています。そして人生の深い尊敬と高い希望、永遠の意味は全てあなた方のものです。(10p)”

もし皆さんがご自分の人生がちっぽけで大事ではないと考えるなら、基本的なレベルで人生について誤解しています。何故なら、人生には無限の価値があり、これを準備し、建てあげて、そして守っていくところに、強く変わらない commitment (責任・約束・関与)があるからです。

神様はそのような人生を毎日、それを与えて維持し守って導き、完成させて下さる神様を喜ばせ讃め称えるような仕方を使いなさいと私達に教えておられます。キリストは、(私達には)見ることのできない沈黙の年月においてさえ、そのようになさいました。キリストは信じて従う人々にも同じようにしなさいと教えておられます。

キリストが人生の静かな年月をどのように過ごしたかを見ることで、私達も自分の人生の静かな季節をどのように過ごすか学んだ方が良いかもしれません。“何か言うことがある場合に、黙っていることを学んでも良いかもしれない。”(p13)イエス様のナザレにおける人生は、たとえ私達には人生がちっぽけで、狭く、くすんでいて、限界があると見えていたとしても、私達が大きな希望とビジョンと力をもって生きるという方法を示しています。

3 最後に、ルカは(40 節)でイエス様が成長して“神様の恵みによって祝

福された”と書いています。(古いキングジェームズバージョンの翻訳では“神様の恵みがイエスの上にあった。”)ルカ2章52節後段では非常に似た部分として、“彼はまた、だんだんと神と人を喜ばせる者となった。”とあります。どちらの節にも同じギリシャ語の charis (恵み又は好意の意、英語の charisma(カリスマ)の語源)が使われており、翻訳は少し違っています。

ここで、charis とはどのようなことでしょうか？ 新約聖書で使われている方法において様々な意味があります。40節と52節で、この charis は grace (恵み)という聖書が“神様の値なしの好意”(罪のある私達にも拘らず与えられる神様の親切)について言うときにが使われている意味では使われていません。イエス様は罪あるお方ではないと聖書でははっきりと教えています。なので、ここでは書き手はそのような意味を grace という言葉に持たせていないのです。

この grace(恵み)という言葉、英語で使う時にも恵みということを使わない場合があります。例えば“彼女は大変優雅に(gracefully)ピアノを弾く。”“彼らはしなやかな(graceful)ランナーだ。”といった具合で、ここでいう grace の意味は、美しさであったり技術を意味しています。ルカがここで用いた grace という言葉の意味は、“favor (親切な行為)、good will (善意)、Loving-kindness (慈愛)”です。

ルカは他のところでも、同じ言葉を使っています。例えば、ルカ1章30節でマリアがキリストが産まれるというお告げを受けた時です。”しかし天使はマリアに言った。恐れることはないマリア、神はあなたを大変喜んでおられる。“他の例として、使徒の働き7章10節後段で、旧約聖書のヨセフの物語を振り返り、“神はヨセフを賢くした。神はエジプトの王ファラオの友になるように助けた。”ここで使われている help(助ける)という言葉は grace という神様がイエス様に向けて使われていたとルカが私達に言った言葉の類型である kindness(優しさ、思いやり)又は favor (親切な行為)なのです。

これまでイエス様が確かな性格と知識を受け取ってこられたことを見て

きました。ここからはイエス様が、先ず最も重要な神様との、更に他の人々との関係において成長されたことを見ていきます。その例はルカ 2 章 40 節の直ぐ後にくる話の中にあり、このメッセージの早い段階で私が述べたことです。12 歳になったイエス様は家族と一緒にエルサレムに行き、そこで両親はイエス様が宮で教師達の話聞き質問されているのを見つけ驚くのです。

この時までには、イエス様は神様との関係において、御自分が神様の子であると知る段階に来ていたしました。イエス様は宮を“私の父の家(49 節)”と呼びます。ヨセフはイエス様が他の誰かを父と呼ぶ時どう感じたことでしょうか。苦しいことだったかもしれません。

このエピソードの終わりに(51 節)イエス様と両親に関する手記があります。“そしてイエスは彼らと一緒にナザレに帰られた。そして両親に従った。”両親の権威に御自身を服従させることはイエス様にとっても簡単なことではなかったかもしれません。結局のところ、イエス様は人類史上初の完全な人間として成長されます。それに従い、両親が御自身を理解する能力の限界を含め彼らの至らぬ点や人間の弱さをよりはっきりと見ることになるのです。

ですから、イエス様の家族が、それ故の独特な両親とティーンエイジャーとの葛藤を持ちながらも神様の助けを受けて家族の人生を成功させるため大変な努力をすることができなのは驚くべきことです。

これら全てで、私達は、イエス様の“沈黙の年月”が私達に多くのことを語っていることを見てきました。神様はキリストとその家族を通して、従う人々の生活に日常的に神様がなさることを私達に示しています。神様は私達の生活を通して私達が成長し、成熟し、発展し続けることを助けて下さっています。私達が自分の役割として、神様が委ねて下さった子供を育てるといふことにおいてもです。神様の御子の人生が与えていることを通して、神様は人間形成と人の発展がどのようなことかを教えておられるのです。神様

は、人として均整のとれた人生の完全な例だけではなく、人生を通じて私達が成長の旅を続けることができ、また他の人が同様のことができるよう私達が助けることができるよう神様の存在と力の視覚的な喚起(目に見える注意)も与えてくださっています。

さあ、これらのことが全てできるように助けて頂くために神様に願ひましょう。

天の神様、あなたの御子の人生を通してあなたが与えて下さった人として成長の手本に従っていけるようにして下さい。イエス様が成長され強くなられたように私達も身体的だけではなく、私達の人生の出来事と経験を通して真に強い人格を作ることができますように助けて下さい。御子が賢くなられたように、私達の生活を通してあなたが私達に教えたいと思われている全てのことを積極的に喜んで学び続けることができるようにして下さい。キリストがあなたの恵みによって祝福されたように、私達にも同じようにあなたの素晴らしい御手が私達にも臨んでいると私達が魂の奥深くで知ることができるよう助けて下さい。そのような恵みで私達を包み、あなたの愛の力で私達の人生を、今日そして毎日、あなたの御国の業のために用いて下さい。イエス様のお名前により祈ります。アーメン。

## 参考

Ainsworth, P. C. (1912). The Silences of Jesus and St. Paul's Hymn to Love. London: C. H. Kelly. Hathitrust Digital Library. Retrieved February 9, 2019 from <https://catalog.hathitrust.org/Record/009972910>

Starr, R. (January 15, 2010). "Ringo Starr: The Drums Are Where The Soul Is." Weekend Edition Sunday. National Public Radio. Retrieved February 9, 2019 from

<https://www.npr.org/templates/story/story.php?storyId=122620250>